

## 最近のイギリス養豚事情について

イギリスはかつて、コツワルド、PIC(ケンボロー)などたくさんの育種会社が作られた国でもあり、養豚に関する様々な技術の発信国として長年にわたり世界をリードしてきました。その後、下記のような悲惨な過去(※)を経て今に至っておりますが、あまりよく知られていません。

### (※)悲惨で耐え難い疾病問題

1980年～90年	80万頭の母豚数を誇る養豚先進国
1999年	イギリス政府が、EUに先行すること14年も前に母豚のストール飼育やスタンション(首かせ:首を床とチェーンなどでつなぎ自由な行動を拘束したもの)の使用を独自に禁止
2000年	豚コレラ発生
2001年	口蹄疫発生

先日弊社で関係がある取引先からの情報でイギリス養豚事情を知る機会が在りましたので簡潔にお知らせしたいと思います。

イギリスは以前から動物福祉の先進国との自負があり、EUとの差別化を意識して早々と母豚のストール飼育を禁止しましたが、コストアップにより生産性が落ち込んでしまいました。豚肉価格には逆らえず、大量の海外からの豚肉の輸入も受け入れざるを得ませんでした。行き過ぎた動物福祉には当然コストがかかりますし、そもそも生産者サイドからの自主規制ではなく政治的な取り組みでした。

しかしその後繰り広げられたEU域内でのグループ管理の法制化は、イギリスが端緒となったことだけは確かですので、養豚業界としては歴史的な事件だったと思われます。それにしてもEUよりも14年も早く中止したとは驚くべきことです。そこまで徹底して差別化を図る必要性は何があったのでしょうか。

豚コレラと口蹄疫が全国的に広がった助長原因として残飯給与が挙げられました。どちらの疾病も全頭淘汰が原則の悪性伝染病ですので、かなりの豚が淘汰され、産業としてはほぼ壊滅的な状況に陥りました。その結果、設備投資はもちろん、早期廃業や直接的な経済的損失、自殺など、結果的には大幅な生産コストの増大を生みました。残飯の禁止は当然ですが、これに加えて当時アメリカから広がりつつあったBSEやクロイツヘルト・ヤコブ病にも敏感に反応し肉骨粉の使用も禁止、更には血しようたんぱくを使用した製剤の使用も禁止しました。血しようたんぱくは特に幼豚に目覚ましい増体効果をもたらすことが分かっていた為、ここでも大きく遅れをとりました。良かれと思ってとった施策も大事な場面で裏目に出て、生産コストの停滞、そして競争力の低下に拍車をかけました。

かつて養豚業界に君臨した先進国は、地に落ち、生産者としての夢も希望も潰(つい)えたかに見えました。しかしこのままでは国内の養豚生産者は本当になくなってしまうと危機感を持った一部の生産者が立ち上がり、スーパーマーケット、街角、学校、レストランなど、様々な所で消費拡大運動に走りました(次頁写真)。かなり長期に力強く運動したおかげでしょうか、イギリス国民の間に国産豚肉を買い求める意識が出てきました。

事実、差別化商品を模索していた高級スーパーマーケットの目に止まり、経済的に生産者を支援すると共に、野外で生まれ、わらの上で育ったイギリス仕込みの特別な「国産豚肉」を宣伝し、一般国民にも差別化商品として浸透していったのです。



「進んだ動物愛護、イギリス産の豚肉を買いましょう」「レッドトラクターポークに熱いご支援・サポートを！」といったプラカードを掲げて町をデモする生産者グループの姿。このような光景は今でも時々見られるという

### イギリスのラベルが貼られたウェイトローズ(スーパーマーケット)の加工品

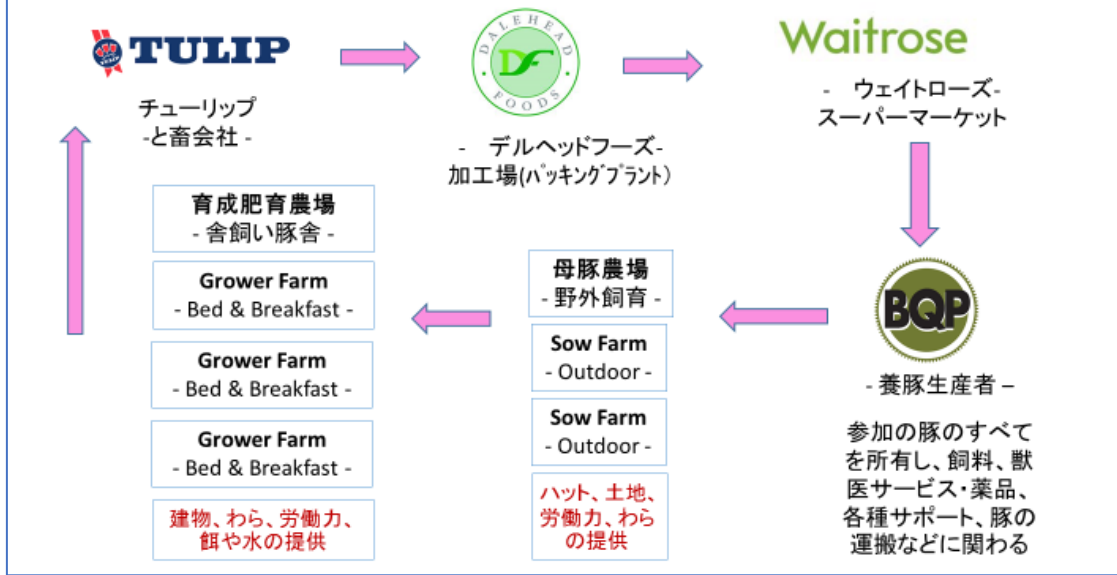


### イギリスで成功しているユニークなインテグレーションモデル

放牧養豚はどこでも出来るものではありませんが、そもそもイギリスの南東部は放牧に適した気候で、現在総母豚数のうち約40%の20万頭弱が、完全に野外で管理されているそうです。比較的大きな規模の生産者を中心にスーパーの求める生産管理基準に照らした豚肉生産が推進されています。

野外のハット(帽子様の小屋:次頁写真参照)で子豚を生み、わらで育ち日光を浴びた牧歌的な良い放牧イメージだけをパッケージにして販売しています。BQPという生産者(図1)は、傘下に50以上の母豚農場、300以上の肥育農場を抱えていますが、最近では更に競合他社をも買収し、母豚数63,000頭の最大規模の養豚会社に拡大したそうです。当然ながらグループ内の農場へ豚や飼料、労働力の提供はもとより、技術提供、獣医サービスなども行いながら深く携わっています。

図1 Integrated Pig Production in the UK  
(イギリスの養豚生産インテグレーション)



イギリスの放牧母豚、ハットと呼ばれる簡易な小屋で分娩する



育成肥育農場の一つのタイプ。わらを使うことは飼育条件の一つ  
(出荷体重は 105kg)



完全に舎飼いのタイプもあるが、  
下はやはりわら敷きで、左側のペンをたたむと  
トラクターで掃除できる仕組みになっている

## 放牧養豚が普及した要因

- 1) 投資が少なく済み、土地さえあれば養豚が始められるということで、近年若者の人気が増しているらしい。50ha で母豚 1,000 頭の放牧分娩管理が可能で、2 年ごとに土地を移動させることで 150ha の土地があれば 1,000 頭の母豚農場が経営できる計算だ。
- 2) 乾燥、砂地の温暖なロンドン周辺の土地が最適、気候も海流の影響で緯度の割には暖かで、めったに 0 度にもならないし、25 度を越えることも少ないという。
- 3) 放牧に適した足腰が強く、野外環境に強い品種や系統は各育種会社でも特別に作出されている。
- 4) 当初、生産性はかなり低かったものの、最近では技術革新で年間母豚当たり 28 頭以上の出荷(肥育素豚)を達成する農場も出てきているという。

## イギリスの養豚の特徴(その他)

- ア) 穀物生産しつつ養豚を行うフランスとは異なり、自作の飼料を養豚に利用する生産者はいない。ほとんどの飼料は外部購入である(国内外から小麦、大豆ミールは輸入)土地がやせていることも一因。
- イ) オーガニック養豚が進んでいるのはドイツで、イギリスではほとんどない。それは条件が難しくコストアップになるからである
- ウ) 繁殖農場は 6,600 戸、平均母豚数は 62 頭と小さい規模が多く生産性も高くない(EU の先進地域に比べると高くない)。反面、もともと普及していた放牧母豚に適した地域を中心に大きな農場こそ広い土地を有効活用している。
- エ) イギリスの生産性は必ずしも良くなく、離乳日令も 27~28 日でようやく 7.0~7.5kg 程らしい
- オ) 繁殖と肥育農場は完全に分離しており、全部で 11,500 戸と、数では日本よりも多い
- カ) イギリスの通常出荷生体重は 100kg 位と小さく、歯は切るが去勢は行わない。雄臭を出す日令まで飼わないのが主な理由で、それでもほとんどの雄豚は加工品に回されるので問題ないという

## まとめ

イギリス養豚業界は、早くから生産度外視の動物福祉運動が巻き起こり、度重なる疾病問題の影響もあって急速に競争力を失いかけてきましたが、差別化を目論んだ大手スーパーが放牧生まれのわらで育った豚肉を販売することで成功した形となりました。イギリスの養豚規模は約半分にはなりませんが、他の国では真似の出来ない仕組みがその独自性を生み出したとも言えそうです。従ってかつての斜陽産業としてのイメージは払拭され、若者も土地さえあれば養豚に参入できるという明るい兆しも見られているようです。

動物福祉について最大の懸案事項は、**分娩柵の使用中止**(=既にスイス、スウェーデンなどが法的規制)に踏み切られるかどうかです。人々は動物の自由を束縛すべきではないという一点のみで生産者に圧力をかけ、圧死や餓死、凍死など本来考慮すべき状況には目を向けません。動物に本当に必要な福祉は何なのかを大変難しい問題です。EUで現在関心が高い昇降式の分娩柵(圧死を 90%も抑えられるのに)さえも使えなくなる可能性があるからです。

【情報写真の出典は M.Muttmuller 氏 (GE.Baker,Ltd)】